

パネルディスカッション 「防災まちづくりに地域で取り組むということ」

スーク創生事務所代表

大島：

本日のテーマは「防災まちづくり」ということで、実践的に活動されている方をお迎えしてパネルディスカッションを深めていきたいと思います。前半は室崎先生から防災から減災へという、いかに災害に私たちは向き合っていくのかというお話を聞かせていただきました。これからのパネルディスカッションは、自助、互助、共助、公助の中の共助についてのお話を深めてまいります。昨今では、防災ハンドブックなど、家族の命をいかに守っていくかという本は、非常にたくさん見られるようになりました。しかしまちでどのように命を、まちを守っていくのかについては、なかなか一般の本屋さんでは見つけるのが難しいと感じております。そこで今回は実践されているそれぞれの地域の特徴を踏まえながら、お話しただけるとお思いますので、たくさんの学びを得たいと思っております。まずはそれぞれの取組についてご紹介いただきたいと思います。

1. 住んでよかったまち、 これからも住みつづけたいまち 京都市東山区六原学区六原まちづくり委員会

六原まちづくり委員会委員長

菅谷：

「住んでよかったまち、これからも住みつづけたいまち」というのが、六原自治連合会の活動の指針であり、スローガンでございます。こういう取組の中、住んでいる人にとって何がいいのか、ためになるのかという視点でまちづくりを進めているというところでございます。

六原は人口が3,319人で、世帯数が1,913世帯、独居世帯が全体の5割を超えているという状況でございます。高齢化率が32.4%と、高齢化や人口減少による地域力の低下、そして空き家の増加と防災上の課題が、まさに浮き彫りになってまいります。



町並みはこんな感じです。



これは全体の地図ではありませんが、学区内の路地です。まさに絵にかいたような密集市街地です。赤いラインで描いている所が、いわゆる非道路と言われている路地や小路で、細い道が多く存在しています。先ほどのお話があったように、こういう所で火災が起こった場合、どんな状況になるか、この地図を見ていただいただけで、ご理解いただけるのではないかと思います。

六原学区のまちづくり活動年表		空き家対策から波及した活動	
年度	自治連の動き		
H12	六原自治連発足	行政事業	- 防災まちづくりも行政事業で開始 - 民泊・ゲストハウスとの向き合い方検討
H22			
H23	六原まちづくり委員会発足	地域自走で継続	防災まちづくり 行政事業 密集市街地・細街路対策事業 民泊・ゲストハウス
H24			
H25		↓	空き家部会で議論開始 専門部会設置
H26			
H27		↓	区のまちづくり助成を 財源に活動継続
H28			
H29		↓	

六原の防災まちづくりは、平成 24 年から始まりました。入口は、行政事業として密集市街地対策としての取組で始まり、約 3 年経過いたしました。その後平成 27 年からは地域自走で継続して取組を進めているところです。空き家や民泊といった活動もありますが、今日は防災に限ってのお話とさせていただきますと思います。



具体的な活動内容としては、ハード的な活動として、路地などの 2 方向避難の扉をつける、それから京都ならではのトンネル路地と言いまして、トンネルの上に倉庫のようなものがあり、それが落下してきた時に路地奥の方にどういった被害を及ぼすのか、避難路が確保できなかつたりしますので、その耐震補強を行っています。これは京都市で助成していただけますので、京都市内であれば皆さんが取組しやすい環境になっていると思います。(※助成事業の詳細は[こちら](#)) 2 方向避難の扉については、あまり費用はかからないのですが、耐震補強については費用がかかってしまう関係で、資金的な問題もありますが、たまたまこの件に関しては、京都市の助成範囲で収まりました。しかしだからと言って、地域の中で数多くの事例が生まれているかという、対象となる地域にお住まいの方々の合意形成が必要になりますので、なかなか合意形成等が難しく、進まないのも現状でございます。

ソフト的な活動については、「防災まちづくり計画」を、行政事業時 2 年半くらいかけて、まちの課題、防災上の弱点等を地域ごとに洗い出し、1 つにまとめております。ただ、六原学区は 30 の町内会からなり、30 の町内会が一律同じ条件ではありません。そこで町内ごとにどういう防災上の課題があるかを皆様方で集まっていたいて、ワークショップ形式で、自分の地域の弱点等を洗い出しております。それをまとめたのが「防災まちづくり計画」になります。今後はこの計画書に落とし込まれている課題を、1 つずつ解決していく事が、まちの安心・安全に繋がっていくのではないかと考えております。

また、六原では平成 18 年くらいから、地域の「あんしんあんぜんマップ」を製作しております。これは今までで 3 回更新しております。さらに防災訓練の企画も行っております。防災訓練は画一的な企画はどこでもありますが、地域ならではの訓練が必要ではないかと、地域の中で課題に即した防災訓練を企画しております。



これは防災まちづくり部会の風景です。不定期ですが、だいたい月 1 くらいのペースで会議を重ねております。右の写真は避難訓練の際、リヤカーが人を運ぶのに役立つのではないかと、防災訓練に使う道具として、取り出して検証しているところです。



先ほどの委員会のメンバーだけで、全ての活動につながるわけではありません。この写真は町内会長さんの集まりなのですが、私どもの学区は毎月1回、町内会長会議を行っております。そこで部会の取組を説明し、協力をいただきながら進めています。多くの方が関わっていただく取組でないと、浸透していかないだろうと、町内会長会議で周知や報告、協力の依頼などを進めております。

今日、本来は防災まちづくり部会で実際に活躍している彼らが説明する方がいいと思うのですが、まちづくり委員会委員長という立場で登壇するようということでしたので、私がお話をさせていただいております。六原では、こうした若い次なる世代の人たちが、大いに活躍していることを申し添えたいと思います。



それを地域全体にどう伝えていくかということで、地域ローラー作戦というのを毎年1回開催しております。地域を8つのブロックに分け、1年に1ブロックずつ、実際に防災まちづくり計画で出た課題を検証しながら、そのエリアの方々に参加してもらって、実際に見て歩こうというものです。実際に地域の中で火災が発生した時に、どのように類焼していくかのシミュレーションをしてもらったり、建物の構造等を見て回ってもらったりしながら、備えを常に意識として持ってもらう取組を進めております。



平成27年に行った「防災の見える化」という取組の中で、先ほどの赤線部分の路地、実は90本近くあります。そのほとんどに名前がついていません。もし火災が発生しても、場所を特定するために、小路や路地に名前をつけ、銘板をつくりました。

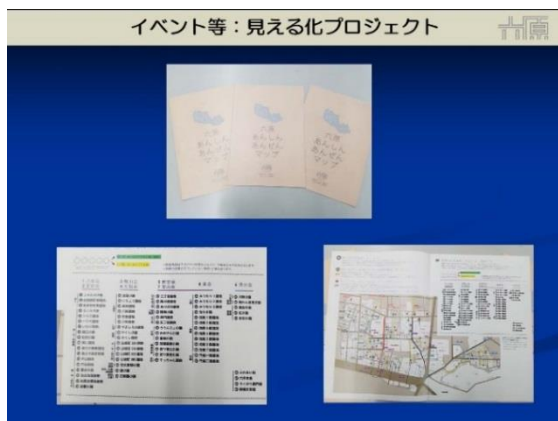


これは実際に取り付けたところです。左上が「やくし路地」右上が「ののさん小路」となっています。路地は行き止まりで、奥へ行っても逃げられない。小路は通り抜けできるという使い分けを行っています。こういう表示をすることにより、緊急に非難する時に、この銘板を見ていただいたら、避難路を自分なりに判断して逃げてもらおうという狙いがあります。路地の名前は町内会長にお願いして、そこに住んでおられる方につけていただきました。私たちが勝手に名前を付けたのでは、やはり地域の方々は反対されると思います。防災の必要性を訴えるなかで、なんとか協力していただきたいとお願ひし、皆さんユニークな名前をつけられています。



その成果として、路地に名前が付いたということと、通り抜けの可否がわかるようになった、これは地域住民にとって、避難する時に目安になるツールとして使っています。そして何よりも消防のシステムにも活用されるようになりました。皆さんご存知のように、京都市の住所は非常に長いです。自分の

住所を言うだけでも、エリアが広く、とても抽象的になります。それまでは番地を言って初めて特定できたのですが、今では例えば 119 番にかけて、「東山区六原いちょう路地」と言うだけで、緊急車両は駆け付けてくれます。実際にそういった事例が 2〜3 件ありまして、つけていなかった路地の住人の方々が「非常に便利なので、私ももつきたい」との申し出があったことも報告させていただきます。



名前をつけて終わりではなく、平成 28 年度はより広く学区民の方々に共有してもらおうと、「六原あんしんあんぜんマップ」の改訂版をつくりました。実際に地域の地図に、つけた路地の名前を落とし込んでいます。今年の 3 月に完成いたしました。



それをより活用して、子どもたちにも地域に愛着を持ってもらう意味において、今年はすごろくのゲームを作っています。この路地を活かしたすごろくです。これを今年の六原フェスタというイベントで、体験してもらって、今、工夫をしているところです。

防災の問題は、迫ってこないとなかなかその気になれない現状がございます。でも実際に普段からこういう意識を高めておくと、火災になった際にも対応できますし、地震の際にも避難所に速やかに逃げられるのではないかと考えます。



今日ここでお話させていただくのに、東山消防署で、六原エリアでここ 10 年間、火災件数はどういう状況だったのか問い合わせたところ、家が燃えるほどの火災ではないものの、10 年で 2 件ほど、事例があるとのことでした。ただ類焼するなど、大きな被害を受けたということはないとのことでした。要はこういう意識が浸透することで、防災や火災といったことに非常に皆さんが敏感になられて、「自分のところから火事が出せない」という意識が強く働いているのではないかと思います。

また、町並みを今後も受け継いでいくために、次の世代に理解してもらい、この地域を受け渡していくということが、非常に大事なのではないかと考えております。防災の取組というのは、得てして華々しさがなく、どちらかというと縁の下の作業みたいになったりするのですが、地域にとっては非常に大事なことなので、とりあえず自主防災会を中心に継続し、より良い町並を残し、次の世代に伝えていきたいと考えております。

大島：

最後の写真は、すごろくでしょうか、地図でしょうか。かなり細かい情報が書き込んであるように見えます。

菅谷：

道幅など、全部コマに区切ってあります。道路に一つひとつマス目が入れてあり、サイコロを振って出た目の数だけ進むという形です。

大島：

リアルに基づくすごろくですか！それぞれの土地条件や、路地の状況を見ながら「こういうことに気をつけましょう」が判る形なのですね。これはどなたの発案で、誰が作られたのでしょうか。

菅谷：

防災まちづくり部会には、地域の人たち、それから建築士会の方々や学識経験者の方々もおられたりします。もちろん行政の方々もおられます。これはコンサルの方の発案だったと思います。今もコンサルの方は、この地域を非常に気に入っていただいて、仕事ではなく趣味で関わっていただいています。

大島：

六原の特徴として、巻き込み方がすごくうまいなと感じます。この年表を見せていただいても、始まりは行政の事業だったようですが、今は自走されていて、大学では造形大や京都女子大、さらに各種専門家の巻き込まれ率が高く、しかも地域内でも若手の次の担い手が育ってきているとのことですが、その秘訣はあるのでしょうか。

菅谷：

よく「誰々がいないと、物事が動かない」と聞きますよね。そうではなくて、一人の力は基本知れているので、色んな人が知恵を出し合ったり、フラットな目線で話し合えることが、非常に居心地を良くしているのではないかと思います。例えば上から「これを協力してくれ」と言ってしまうと、だんだんさせられている感が強くなって、参加意欲が衰えていくだろうなと。でも同じテーブル目線の中で色々話をする中で、色んな人の意見を、面白いことに反映させていくなかで、関わっていただいた方も達成感が得られるような、そういう仕組みの中で動いているというのが現実です。

大島：

そういう意味では、自治連合会を拝見すると、東山区は平成に入ってからできたところが多いのですが、自治連合会自体が平成12年にできた新しいというところも大きな要因でしょうか。

菅谷：

実は阪神・淡路大震災が大きなきっかけになっています。それまでは各種団体協議会であったり、市政協力委員会であったり、社会福祉協議会が地域の自治の運営をつかさどっていたところですが、そこに町内会長さんの役割や立場がずっと反映されてない。やはりまちの自治を考えると、町内会というのは非常に大事な組織ですので、そこを中心とした形の中に、各種団体がサポートしていくということを、

自治連合会の本分とすべしだろうというところが、大勢の意見を占め、平成12年に発足しました。ですからそんなに歴史は長くないのですが、かなり短い中で、地域の課題やハード的な問題なども解決できてきたかなとは考えています。

大島：

六原自治連合会のできたスピリッツというのが、脈々と現在の活動に活かされているみたいな感じですね。

菅谷：

まちの視点や住んでいる人の視点も非常に大切にしなければならないという気風が、脈々と続いているということです。